

# カントウータ

## Cantuta

## No.5

平成 16年 4月発行  
(社)日本ポリビア協会

### 協会からのお知らせ

#### 日本ポリビア修好 90 周年の記念事業 (時間変更のお知らせ)

会場設営の都合により、記念式典及び  
記念講演を 12 時より、パーティーを 13  
時より開催いたします。ご了承ください。

#### 稲嶺沖縄県知事を表敬訪問 ・・・沖縄ポリビア協会と交流始まる・・・

来る 4月 13日開催される日本ポリビア  
修好 90周年の記念事業の一環として開催  
される「写真展」につき沖縄ポリビア協  
会が所有しているパネルの借用をお願い  
に当協会渡邊専務理事が会員の知花弘和

氏と那覇を訪問。3月 19日は沖縄県の芸  
術家の作品を一堂に集めた「沖展」を見  
学し併せ同会場でポリビアの民芸品等を  
即売していた沖縄ポリビア協会のテント  
を表敬訪問し、ポリビアのポリビア人学  
童のための育英資金の基金 1,000 万円を  
目指して頑張っている協会の皆さんと懇  
談。また夜は玉木会長、玉那覇副会長、  
久手堅・平良・上原理事・ドクトル吉田  
他多勢の役員の方々より、歓迎会が催さ  
れ、沖縄移住地 50周年記念行事等に関わ  
る協力関係につき意見交換がなされた。  
翌 20日は嘉手刈オリオンビール副社長も  
加わって稲嶺沖縄県知事を表敬訪問し、  
知事のポリビア訪問と「50周年事業」へ  
の協力を陳情した。



左から上原理事、玉木会長、渡邊専務理事、稲嶺知事、嘉手刈オリオンビール副社長、  
吉田博士、東(あずま)・沖縄ツーリスト社長

### 白川新大使ご来訪

佐々木大使の後任として、新たに在ボリビア大使館の特命全権大使になられる白川光徳大使が、当協会担当の外務省中南米第一課の津田文代外務事務官を帯同され、ご挨拶に見えられ、山下会長、林屋副会長、渡邊専務理事、大貫理事、細野理事と歓談し情報交換を行いました。白川大使は、先輩大使であった林屋大使や、ボリビアで遺跡発掘に取り組まれる大貫東大名誉教授の話に熱心に耳を傾けておられました。



左から細野理事、白川大使、津田外務事務官

### 懐かしい顔！ ～近況報告～

去る1月9日、「北国の春」の作詞家「いではく」氏ら高校時代の同級生9人と那覇へゴルフ旅行をした折、オキナワ移住地の第一次入植者である安仁屋晶さんおよび琉球政府・移住公社、海外移住事業団、JICA時代と移住事業に携わってきた上原盛毅さんご夫妻と会食することができました。晶さんは悠悠自適、息子さんは熊本大学の工学部の教授になられた由、上原さんはJICAを退職し、那覇に戻り琉球大学と沖縄国際大学で週二度の講座をもち元気に活躍していました。(渡邊英樹)



左から

上原盛毅ご夫妻、安仁屋晶氏、渡邊専務理事

日ボ修好90周年・オキナワ移住地50周年！

= 渡邊専務理事、サンヒネス代理大使と会談 =

来る4月13日(火)は、日本とボリビアとの外交関係が結ばれて90周年を迎えます。また、今年はおキナワ移住地入植50周年の年にも当たります。当協会としても、できるかぎりこれらの記念行事に協力していきたいと考えており、2月16日ボリビア共和国大使館のパトリア・サンヒネス臨時代理大使との会談においても、その意向を伝え具体的行事の検討に入りました。また、オキナワ移住地50周年関係者として、オスカル長嶺氏も同席し、三者が協力しあっていくことを確認し合いました。

### ボリビアの話題

#### 元内務大臣の不正金隠し疑惑

ゴンサーロ・サンチェス・デ・ロサダ政権時の内務大臣ジェルコ・クコッチ氏の幼なじみの男の営業所に200万ボリビアーノス(約25万ドル)が隠されていた。男は警察に逮捕された。「この金はジェルコ・クコッチ元内務大臣から預かるよう依頼された」といい、元大臣は「政府の特別資金の一部で、精算はサンチェス前大統領に提出済み」と述べた。奥の深い問題と見られている。

### 一万台のバイクで道路封鎖

書類手続きなしで不法に自動二輪車が国内に多量に入り込んでいることから、政府は車両のナショナルリサシオン（正規の輸入手続）を始めた。モンテロ口市はバイクが主要な交通であるため、手続きにかかる費用 400 ドルは高すぎると値下げを要求。要求に応じない政府に対し、モンテロ、サンタクルス間の道路に約 1 万台のバイクで封鎖し、値下げを要求。2 度の封鎖は県の介入により解除し、200 ドル余りの値下げに成功した。

### 集中豪雨で橋が流出

12 月中旬、ティモレからビヤ・トゥナリに行く途中のチャバレ川にかかる橋は、集中豪雨による増水で、350 メートルある橋のうち 250 メートルが崩れ落ち流された。橋の上を走行していた車 3 台と TRANS COTOCA 社の長距離バスが流され、犠牲者は死者 8 名、行方不明者 50 名と発表。

### 記録的な猛暑続く

連日猛暑に苦しむサンタクルスは 1 月 28 日史上初の消費電力を記録。気温 38.53 度。電力消費 250.87 メガワット。扇風機やエアコンが飛ぶように売れ、アイスクリームやかき氷売りは大忙し。暑さのため空軍士官学校の生徒が訓練中に倒れたり、自転車で走っていた男性が意識を失ったり、死者まで出た。

### 蚊を媒介疫病に注意喚起

サンタクルス県中部や北部では連日雨が降り多湿な日々が続く、サンタクルス市内を中心にデング熱が発生。1 月すでに 27 件が確認された。サンタクルスは平坦な土地のため、降雨後の排水問題が課題。ロベルト・フェルナンデス市長は対策を講じる

ため、中央政府と掛け合っているが、思うようにいかないとか。

### 「海への出口」問題最近の動向

ボリビアは、チリとの間の国境紛争から起こった太平洋戦争(1879-84)でアントファガスタ州を失い、内陸国となった。その時以来、同国にとって「海への出口」を回復することが最重要課題のひとつとなっているが、この問題についての最近の動向は次のとおりである。

1、昨年 12 月 18 日、カーター元米大統領は、ボリビアの議会において演説を行い、その中で「海への出口」問題について次のように述べた。

(1) ボリビア、チリ及びペルーが共同で海への出口問題について話し合うことを期待している。3 カ国間でこの問題に関する話し合いが始まれば、カーター・センター及び他の多くの機関がこの問題を解決するために支援を惜しまないであろう。

(2) 自分は、米国政府のみならず国連に対しても本問題解決のために影響力を行使する用意がある。

2、本年 1 月 4 日、カルロス・メサ大統領は、テレビを通じて施政方針演説を行ったが、その中で「海への出口」問題について次のように述べた。

「海への出口」問題は、ラテン・アメリカ地域全体に関係している。従って、地域の安定の実現には、我が国の「海への出口」問題を避けて通れない。自分は、チリとボリビアが共通の目的を構築できることを確信しているが、それは国土が返還された時にのみ可能になる。問題の解決には、ペルー国民との連帯を図ることを考えている。

3、また、1月6日、メサ大統領は、10名の歴代外務大臣経験者を招集し、「海への出口」問題について協議を行った。協議の結果、メサ大統領は今後この問題を含め自由貿易協定などの国際問題に関する諮問機関として、この10名の外務大臣経験者によって組織される「戦略諮問会議」を創設した。

4、1月12日及び13日にメキシコのモンテレイで開催された米州特別サミットに出席したメサ大統領は、トレド・ペルー大統領、チャベス・ベネズエラ大統領及びブッシュ米大統領と会談したほか、ラゴス・チリ大統領と閉会式において議論の応酬を行った。

(1)メサ大統領は、「トレド・ペルー大統領は、ボリビアとチリが「海への出口」問題に関して協定を締結した場合、これに異を唱えない旨の前向きな姿勢を表明した」と述べた。

(2)チャベス・ベネズエラ大統領との会談で、メサ大統領は「海への出口」問題に関し、チャベス大統領のボリビアへの支持に謝意を表明した。

(3)メサ大統領は、ブッシュ米大統領との会談後の記者会見で、「ブッシュ大統領は、ボリビアにとっての「海への出口」問題の重要性に理解を示すと共に、

この問題解決の成功を望んでいる旨を述べた」ことを明らかにした。

(4)閉会式において、メサ大統領とラゴス・チリ大統領との間で、「海への出口」問題を巡り概ね次のような議論の応酬が行われた。

メサ大統領は、「ボリビアはチリに対し、21世紀を見据えた上で、公正の原則にもとづいてこの問題解決のために対話を行うことを提案する。ボリビアの要求は海への有効なアクセスを回復することに尽き、それ以外はチリ側の如何なるオファーにも応じることはできない。チリとの外交関係の再開は、この問題が解決された暁に始めて実現する」と述べた。

これに対しラゴス大統領は、「ボリビアの要求は、両国間の緊張を高めるものであり、これが緩和されるには少なくとも25年を要する。チリはボリビア産天然ガスの北米への輸出のための港等の便宜を提供しようとしてきた。またボリビアはチリとの間で最も通商上の恩恵を受けている国である。ボリビアとの間に主権問題は存在しない」と述べた。

(この記事は、外務省、中南米一課からご提供いただいた資料に基づいて取りまとめました。)

**ボリビアンチャリティゴルフクラブの皆様ありがとうございました!**

**昨年、結成された上記クラブの皆様より¥117,005円のご寄付を頂きました  
ここに謹んで感謝の意を表しますとともに有効に活用することをお約束します**

**寄 付 者 ご 芳 名** (あいうえお順)

い	で	は	く	様	荻	原	真	鉄	様	金	山	仁	志	郎	様	歌	門	英	雄	様
木	田	徹	郎	様	高	橋	勇	様	佐	藤	順	一	様	田	中	義	仁	様		
田	中	陽	子	様	富	樫	修	様	土	橋	洋	様	中	村	美	恵	様			
萩	生	光	紀	様	浜	垣	剛	様	深	沢	樹	代	様	星	野	幸	子	様		
松	下	元	様	松	田	環	様	松	村	能	忠	様	松	村	恵	美	子	様		
柳	田	孝	一	様	依	田	壘	男	様	渡	邊	英	一	郎	様	渡	邊	英	樹	様

## セルバンテスとボリビア

### その2

林 屋 永 吉  
(元スペイン、ボリビア大使)

この陳情書の末尾に書き込まれた枢機官の検討の結果は、「当地において然るべき恩賞を与えることを探求すべし」の一行で、彼の願出は却下されている。枢機官らの検討は約10日間で終わり、セルバンテスの望みは遂に達成されなかった。

この陳情書が提出された1590年といえ、セルバンテスは43歳、6年前に結婚した18歳も年下の妻カタリーナを実家に残し、アンダルシア地方の各地を廻って艦船納入用の小麦、大麦、オリーブ油などの調達に当たっていた。

既に処女作の牧人小説『ガラテア』を5年前に世に出していたし、戯曲『アルジェー物語』、『ヌマンシアの壊滅』をはじめ、かなりの数の戯曲を書き、その内上演されたものも少なくなかったが、文名を博するには程遠く、文筆で身を立てる自信をすっかり失っていたようである。それに2年前の1588年には行き違いもあって教会から破門処分に付せられていたから、失意の中にあっただけのものと思われる。

その頃、セビリヤの町を流れるグアダルキビール河畔には、金、銀、エメラルド、真珠をはじめ珍奇な品々を満載した船がインディアスから次々と到着していたし、新天地に富と冒険を求めて向う若者たちが相次いで船出していた。

新大陸については、既にオビエードの『インディアス自然史概略』(1526)も、ラス・カサスの『インディアス史』(1526-61)も、ロペス・デ・ゴマラの『インディアス総史』(1552)も、シエサ・デ・レオンの『ペルー誌』の第1部(1553)も書かれていたし、アコスタの『インデ

ィアス自然文化史』(大航海時代叢書、第1期 III, IV)も丁度世に出たところであった。これらの書物がどの程度読まれていたかは別としても、新大陸についての情報は当時かなりの量に及んでいたと思われるし、それは失意の40男を魅了するに十分であったといえるだろう。

セルバンテスが陳情書に挙げた4つの職が当時空席であったすべての職であったかどうかは詳かではない。空席になっていたいくつかの職から、自分にも与えられそうで、しかも魅力のありそうな職を選んだのかもしれないが、いずれにしても、どれも一応の職だったといえるだろう。

まず最初にあげている新グラナダ王国は現在のコロンビアとベネズエラとブラジルの北の一部を合わせた広大な地域を占め、サンタ・フェ(現在のボゴタ)にアウディエンシア(聴聞庁)が置かれていた。官制上はペルーの副王朝の管下にあっただけほとんど独立に近く、その各地からは、金、銀、エメラルド、真珠が産出し、スペイン王国にとってはまさにメキシコ、ペルーに次ぐ宝庫だった。管内のマルキタ鉱山は、その後の発展こそポトシーの銀山にかなわなかったが、極めて秀れた銀質の鉱山だったし、ムソの山からは、既に1564年から多量のエメラルドが産出していた。その経理官であるからそれほど高官とはいえないまでも、決して悪くない職であっただろう。

次に出てくるグアテマラのソコヌスコ州は、現在のグアテマラとメキシコの両国にまたがる太平洋に面した地域で、カカオの産地であった上に、ともかくもゴベルナドールだから、それなりの魅力はあっただろう。

第3に出てくるのはカルタヘナにおけるガレーラ船団の経理官職。カルタヘナ

は現在のコロンビアのカリブ海に面した天然の良港で、当時はスペイン王国がカリブ海に持つ最も重要な港の一つであった。本国と新大陸を結ぶガレオン船は殆どすべてこの港を中継地として使用していた上にこの港は南米大陸にもたらされた黒人奴隷の取引場でもあったから、アウディエンシアの所在地サンタ・フェよりもはるかにいんしんを極めていた。

そして最後に出てくるのが現在のボリビアの首都ラ・パス市の代官（コレヒドール）である。代官は王室の直接任命によるものであり、市議（レヒドール）の中から選ばれる市長（アルカルデ）より上職、この町を中心とした地域の最高権者である。

ラ・パスは、海拔 4000 米から 3300 米にわたる渓谷の谷間に設けられた町で、平和を意味するラ・パスと名づけられたのは、1548 年、征服者の間に展開されていた血みどろの闘争が終焉したのを記念したものである。この町は元々、第一にはこの一帯のチュキヤボ（またはチョケヤブ）金の床の意 渓谷に産する砂金の採取を目的としていた。そして第 2 には、インディオ時代からのポルコ銀山の開発の拠点とするため 1539 年に設けられたラプラタ（現在のスクレ市）と、植民地時代に入っても極めて重要な地域を占め続けていたインカ帝国時代の首都クスコとの間の中継地として建設されたものであった。ところがポルコ銀山の近くのポトシー銀山がおびただしい量の銀を産出し始め、新大陸最大の銀山の名をほしのままにするに及んで、この町の重要性も高まり、1570 年の記録（サリナス・ロヨラ報告書）では、市民（スペイン人）30、住人（インディオ）200 とあったのが、1586 年には、スペイン人の住居 500、インディオの住家 1000 となっていた（カベ

サ・デ・ラバカ代官報告書）。しかも、インディオの住家こそ藁葺きのアドベ造りだったが、スペイン人の住居のおおくは瓦葺きで、少なくとも玄関や窓は煉瓦や漆喰で作られていたというから、町としてもかなりの町であっただろう。

（つづく）

## アンデスの考古学と考現学

木村 秀雄  
（東京大学大学院教授）

### 日本人によるアンデス先史学

日本人がアンデスの古代文明の研究を始めてから、今年で 45 年になる。近年、ペルーのクントウルワシ遺跡の発掘など重要な発見が相次ぎ、日本国内でも注目する人がふえた。アンデス考古学を専攻する大学院生の数も日本全体で 20 人を超える。この人数は少ないように思われるかもしれない。しかし、私の世代あたりでは、数年にやっと一人この分野を専攻する学生が出る、といった状態であったことを考えると、隔世の感がある。

このような日本におけるアンデス考古学の一つのブームを作り出した立役者の一人が、クントウルワシの発掘調査を主導した大貫良夫である。クントウルワシからはさまざまな金製品が出土し、これは学術調査によって埋蔵状態がきちんと把握された初めてのペルー＝アンデス金製品である。これまでのものは、調査によらない盗掘によって発見されてきたものなのである。この後、ペルー北部海岸地帯のシカン遺跡やシパン遺跡でも、大量の金製品が発掘され、アンデス考古学は新しい時代を迎えたのである。

## クントゥルワシ遺跡と大貫良夫

大貫が率いた調査団の学術的成果をまとめたものに、加藤泰建・関雄二(編)『文明の創造力 - 古代アンデスの神殿と社会』がある。そしてまた、大貫自身の経験をエッセイ風に綴った『アンデス「夢の風景」』(中央公論新社、2000年出版、2000円(税別))という本もある。この本を読んでも、また大貫との個人的なつきあいかからも、学者然とした気取りがなく、おおらかな大貫が成し遂げた成果は、必至に学問に励んだから成し遂げられたというより、ただ運がよかったからではないかと思えるほどである。

しかし、「考古学者の善し悪しは、重要な発掘成果の現場にいたかどうかによって決まる」という言葉がある。これは運の善し悪しについていっているわけではない。現場にどれだけ時間とどまり、またその中から遺跡を見る目をどれだけ磨いたかによって、成果は決まるということを行っているのである。クントゥルワシという有名な遺跡の発見を可能にするためには、それまでに築き上げてきた信用、この大事業に着手する決断力、大きな調査グループを長年運営する統率力、現場にこだわる執念など、凡人には備わっていない大きな力が必要なのである。大貫は、ただ運がいいだけではない。

### 「インカの末裔」はやめてほしい

アンデス古代文明が注目されるのは、私もとても嬉しい。ただ、現在のアンデスに生きる先住民を「インカの末裔」といったり、彼らの集落を「遥かなるインカの村」と呼んだりするのは、やめにしてほしい。

インカの国家がスペイン人に征服されてから、もう500年になろうとしている。アンデス先住民の文化に古い慣習の名残

があるといっても、500年間何も変わらなかったわけではない。彼らは500年という長い年月をかけて歴史の中を生き抜いて来たのである。私は、アンデスの現在を理解したい。私の専門は、アンデス考古学ではなく、アンデス考現学である。

『クロスロード』2003年12月号55頁より抜粋

## ボリビア百話

### 国土の大半を失った国

#### その2

高畑敏夫

(元ボリビア大使)

### もう1つの太平洋戦争

硝石とは別に、ペルー、ボリビアの太平洋岸はもう一つの換金物資の宝庫でもあった。さきに触れたグアノは、1840年代から肥料として大量に輸出されていた。ペルーはグアノに支えられて約30年間中南米で最も豊かな国となったが、同時に、グアノを抵当にして対外借入を重ねたため、中南米最大の累積債務国に転落した。この事情は1973年の第四次中東戦争後のエネルギー危機のおかげで多額の外貨収入を得た中南米の資源輸出国がまもなく累積債務国に陥った事情と酷似している

この辺りから後にペルー、ボリビア対チリの間で繰り広げられることになる戦争の経緯については前田正裕氏(元ドミニカ共和国駐箚大使、社団法人ラテン・アメリカ協会前理事長)の名著『ラテン・アメリカと海』に詳しく、ここでは同書を参照させていただいた。

ペルーに移住していたスペイン移民の地主との紛争で移民側に死傷者が出たことに抗議するスペイン人がペルー領の島嶼を占領し、多額の賠償支払いを要求したことにより、1866年にはチリ、ボリビア、エクアドルの諸国がペルーを後押ししていわゆる『対スペイン4か国連合戦

争』に発展した。このボリビアとチリが同盟関係にあった 1866 年 8 月、ボリビアのメルガレホ政権はチリと条約を結び、南緯 24 度線をもって両国間の国境とすること、但し 23 度線から 25 度線の間地域のグアノ採取から得られる利益、及び鉱物輸出に対する輸出税収入は両国で折半することで合意を見た。

チリ人は逸早く 24 度線以北に進出し、硝石や銀鉱山を発見してボリビア政府からコンセッションを得、チリ資本や労働者を入れてアントファガスタ県を実質的に支配するようになった。県都アントファガスタ市では人口の 85% がチリ人であった。彼らはさらに北に延びてペルーのタラパカ県に入り、硝石採集施設の約 50% がチリを始め、英、独、仏等の外国資本によって占められ、県都イキケの人口の 70% が外国人であった。自国の領土の開発を主として外国人に任せられた結果、母屋を奪われる羽目にいたる事情は、1836 年にメキシコがテキサスを米国人に奪われることになったのと軌を一にしている。

対スペイン戦争の終結と共に 4 か国間の同盟関係も消え、同戦争でスペイン艦隊撃退で主役を演じたチリは軍事大国に発展し、これについて危機感を募らせたペルー、ボリビアの両国が 1873 年 2 月、「あらゆる外国の侵略」に対抗するため、秘密の防衛条約を締結した。この条約は主としてチリや英国を念頭に置いたものであったが、それはまもなくチリの知るところとなり、同国は海軍力のさらなる増強に乗り出した。

翌 1874 年にボリビアとチリは先の 66 年の条約を改定し、これにより両国はその国境を南緯 24 度線に画定すると共に、チリはその北部より生ずる一切の収入に対する権利を放棄し、その代わりボリビアは、その領内にあるチリ鉱業に対し、

以後 25 年間租税を増やさないことを約束した。しかし 75 年 3 月には、財政難に陥っていたペルー政府が硝石産業の国有化を断行し、しかも企業接收の代償として与えた利付き証券の買い戻しもできない状態に陥った。他方ボリビアも 78 年にいたり、ペルー政府の圧力の下で硝石の輸出に新税を課し、これを拒否したチリの「アントファガスタ会社」を接收する挙に出た。

チリはこの措置を 74 年の改正条約違反として 1879 年 2 月、約 200 名の軍隊をアントファガスタに派遣してこれを占領し、さらに増援兵力を送ってボリビアの全海岸線を制圧した。その間ボリビア政府は 3 月 1 日チリに宣戦を布告し、チリは翌 4 月ボリビアとペルーに宣戦布告した。かつて第二次世界大戦のうち、主として日米間の抗争の部分が「太平洋戦争」と呼ばれたが、この 3 か月間の戦いも「太平洋戦争」( Guerra del Pacífico )と呼ばれる。

広大なアタカマ砂漠が地上軍の移動を阻んでいたため、戦争の帰趨は制海権の掌握にあった。艦齢 14 年の小型老朽艦 2 隻を主力とするペルーに対し、2 隻の新造装甲艦を擁するチリが圧倒的に優勢で、ペルーは同年 5 月のイキケ沖海戦で虎の子の 2 隻の内の 1 隻を失って組織的な戦力を喪失した。もう 1 隻のワスカルは僅か 1000 トンあまりの小型艦ながら海上ゲリラ戦で目覚ましい活躍をしたが、同年 10 月チリ海軍に補捉され、拿捕された。

制海権を完全に掌握したチリは翌 80 年の始めアリカとタクナを、さらに 81 年 1 月にはリマを占領した。ペルー軍は山間部にこもり、ゲリラ戦を続けたが、83 年 10 月、ペルーのアンコンにおいてチリと講和条約を結び、タラパカ県とアリカ県をチリに割譲した。他方ボリビアは 84 年にチリと休戦協定を結び、1904 年の講和



条約でアントファガスタ県のチリへの割譲を認めた。(つづく)

## ボリビアで活躍する日系人

その1の5

### ペドロ・シモセの両親と弟妹たち

細野豊(詩人)

手元にある4枚の写真を見ながら、この文章を書いています。

1枚目は、ペドロ・シモセの生まれ故郷、ボリビア国ベニ州リベラルタを流れる大河、マドレ・デ・ディオスの船着場の写真です。ゆったりと流れる川の岸辺に、草葺き屋根のついた船、水平な板張り屋根の船、手漕ぎのボートなどが繋がっています。どの船も古びています。川の水は概ね澄んでいますが、岸に近いところはやや濁っています。

2枚目は、リベラルタの日本人墓地の写真で、西洋風の墓のほかに「故之墓」と漢字で縦書きされた墓石も写っています。

3枚目は、同じ墓地内の「慰霊塔」と漢字で書かれた銅版を嵌め込んだ白い石柱の傍らに、移住事業団(JICAの前身)時代からの大先輩、沢地隆治さんが立っている写真です。

4枚目は、ペドロ・シモセのご両親と一人の弟と二人の妹が写っている写真です。写真に向かって左から弟さん、父上(下瀬甚吉氏)、母上(ライダさん)、上の妹さんの順で並び、母上の前に下の妹さんが立っています。

これらの写真は、沢地さんが1969年5月にベニ州へ出張された時に撮られたものです。私がペドロ・シモセに関心を持ち、彼の詩の翻訳、研究をしていることを知って、昨年(2003年)5月に送ってくださいました。(正確には、貸して下さったものをコピーしました。)

ペドロ・シモセが、ボリビアの軍事政

権と対立した結果スペインへ亡命したのは1971年ですから、この写真が撮られた時点にはボリビア国内にいたはずですが、ここに写っていないところを見ると、リベラルタにはいなかったのでしょうか。

また、「カントウータ」No. 2に掲載した彼の詩「OTOSAN」に(1882-1970)と書かれているとおり、父上はこの写真が撮られた翌年に亡くなられたこととなります。父上の生年について、この詩には1882年とありますが、「日本人ボリヴィア移住史」(1970年、日本人ボリヴィア移住史編纂委員会発行)では、明治18年(1885年)となっています。後者は、甚吉氏ご本人から聴取して書いたものと推測されるので、こちらが正しいと思われます。

母上については、「健在だ」と、ペドロが2001年10月に来日して、日本詩人クラブの有志と懇談した折に言っていました。

弟さんは、私がJICAのサンタクルス支部に勤務していた1975年頃に事務所を訪ねて来られ、お会いして話をしたことがあります。今はどうしておられるのでしょうか。ご両親や妹さんたちとは、お会いする機会がありませんでした。

今回は、上記ご一家の写真とペドロ・シモセの写真および彼の詩「リベラルタ」を掲載します。

ペドロ・シモセ



ペドロ・シモセの両親と弟妹たち



リベラルタ (細野豊・訳)

私は住む国を替えたが、おまえは元のままだ。

おまえのところへ戻るとき、私は死者たちと会話し、

私の愛はいつも勝利を収める。

おまえの夕暮れを眺めるほどすばらしいことはない。

われわれの祖先が夢見た夢を私も夢見、日暮れた紫色の空気の中を巡って、おまえのことを想う。

おまえの湿った芳香の中で生まれ変わる

、  
奥に隠された小川の霧の中に私を探しながら、

私自身から遠く離れ、川や沼で、おまえの蒸気船が私の幼児を走ったとき一緒に発見した

あの島にあった難破船の中で。

私はゴムの木の涙を流す傷になりたくない、

この苦いアーモンドの中で、  
伐り倒れる樹木のこの轟音の中で、  
稲妻と雷鳴が轟く暗い空の痛みの中で  
朽ち果てたくもない。

雨が降り

私はハンモックの中でこの甘い習慣と闘っている。

雨が降り

私は貧しいままの母がペチュニアに水を撒きつづけているその場所で  
終わりのない酩酊に我を失う。

雨が降り

私の友人たちが過ぎゆく生命を歌い、ペダルがボールの後を追いかけていく。

雨が降る。

外ではカヌーが流れを下る風景の中で、  
とめどなく降っている。

虹が出てもお

私の中では雨が降りつづいている。

詩集「リベラルタとその他の詩」より

(つづく)

**じゃがいもの旅の物語**

**インカからジパングまで**

**その5**

杉田房子(旅行作家)

「この先の宿場で横道に入ると、海が近かったな。潮を吹く鯨を見たことがあったが」

どこかの隊列の話が聞こえる。

「砂漠を一日がかりで越えなければならんがね。浜で貝がいっぱいとれたな」

海岸から山地へは、乾魚や海草に貝から取った染料などを物売りが持ってきた。じゃがいもと、トウモロコシ、毛皮などと交換する。

「金の鉱山は、あの山の向こうだろう。ひどい湿気でまいったぞ」

まったく違う話も聞こえた。

「横穴から縦穴へ、何十段も下がって石を掘り、かつぎ上げるのがつらかったなあ」

金山や銀山近くのインディオは、4カ月交代で働かされた。石を掘って運ぶ者。砕いて水で濾す者。集めた金を炉で溶かし、延棒にする者。そうしてできた金銀はすべて皇帝の下に集められ、建物や行事の飾り、栄誉や褒賞に使われる。

黄金の賞を授ける時、皇帝はこういった。

「太陽と同じ輝きを、汝の胸にきらめかせよ」

のろのろと、皇帝の道をラムの隊列が行く。そこには、金銭の輝きを詰めた袋が幾つも揺れているはずだった。

皇帝の道は山裾の町の神殿をはるかに望む頃、隊列で身動きもつかなくなった。冬至近い日は駆け足で暮れていく。ジャガイモを焼いて夕食をとった。ラムの糞を乾かしたサキエを燃す青白い炎が薄暮に揺れ、焼きジャガイモの香りがただよう。

「山地の本物のパパスの匂いだぞ」

近くで、男たちが鼻をひくつかせた。パパミクク　じゃがいも食いとも呼ばれるインディオは善し悪しがすぐ判る。「暖かい平地のパパスは芽はじきにだすし、皺は寄るし、色は黒くなる。そこへいくと山地のパパスは生でも長く保つからな」

厳しい風土で生きるために、大地がはぐんだ天性なのか、アンデス山地のじゃがいもは掘りだされてしばらくすると、休眠する。長いものでは一年近くも休眠して、芽もださず、変質もせず、形も変わらない。

「まったく、山地のパパスは食物の黄金だ。ピラコチャだって欲しがらるだろう」

と男たちがいいあうので、村長と村人

はこれまでの道々、耳にしてきた話を改めて思い出し、顔を見あわせた。

ピラコチャには、ピラコチャの神がいる。天も地も海も人も、その神が創り、治めている。その神にインディオも従うべきだ、とピラコチャはいう。皇帝は、従わないから虜になった。

ピラコチャは西の海から来た。が、北の海にもいるし、東の彼方にはインディオの何十倍、何百倍のピラコチャがいて、好きな時にやってこられる。

インディオの戦士を一撃で倒す雷音とともに火を吐く腕は銃という。鎧という固い着物と、兜という固い帽子は、戦士の投石器の大石もはね返した。

槍という固く尖った棒に、刀という細くて鋭い板もある。皇帝に仕える貴族で手向かった者の胸から背まで槍は突きとおしてしまった。

逃げようとすればラムやアルパーカの何倍も大きい馬という獣に乗って追ってくる。山道も川も砂漠も、まるで野道を駆けるように走り抜けてしまう。

欲しがっているのは物だけではない。女も欲しがる。皇帝の都の神殿に使える聖処女まで、手ごめにした。守ろうとした神官の首は、刀で切り落とされてしまった。

インディオの若者から選ばれて、皇帝のためにじかに働く男はヤナコーナと呼ばれた。なかには戦士や役人の長となる者もいる。女はアクヤクーナと呼ばれ、なかには聖処女として一生を神殿で奉仕する者もいる。

アクヤクーナのなかでも特にママクーナといわれるこの聖処女は、太陽の祭りの当日でさえ、普通のインディオの目に触れることはなかった。

ピラコチャは、そういう奥深いところまで足を踏み入れているのだ。(つづく)

## スペイン語スピーチコンテスト

田中ネリ(CGBJ)  
ノエミ・メネセス  
ロサルバ・アリヒロ

2003年の12月、日本におけるスペイン語新聞のインターナショナルプレス社が主催して第1回スペイン語スピーチコンテストが実施された。対象は在日ラテン・アメリカ人の青少年である。

在日ボリビア人の調整グループを代表して17歳のロサルバ・アリヒロさんがコンテストに参加した。アルバイトをしながら定時制高校に通うロサルバさんは数年前、出稼ぎで既にボリビアを離れていた両親と暮らすために来日、祖国や友人と離れるのは辛かったが、親に会いたかったので、と述べている。これは悲しい、しかも葛藤的な選択であったと思われる。

しかしこのような経験は彼女に限られたものではなく、多くのラテン・アメリカ人青少年の共通経験である。このように来日した子供たちは学校に適應するため、必至に日本語を学んでいったのが想像される。だがその反面、母語をだんだんと使わなくなっていく、スペイン語しか話さない親と、日本語しか話さない子供との間に深刻なコミュニケーションの問題を抱えている家族も出てきているようである。

ロサルバさんはスペイン語を流暢に話すが、家族以外とスペイン語で話す機会が少なく、コンテストへの参加動機はスペイン語を練習したいことと母国を紹介することだと言う。スピーチの中で彼女は国旗と共に国のシンボルであるエスクードに関して話しており、その一部を和訳して読者の方々に紹介したいと思う。

エスクードとは盾、あるいは盾形紋章であり、国旗と共に、国家の重要な象徴

とされる。ボリビアのエスクードは、スペインから植民地としての位置から独立を遂げた1825年より作られており、様々な修正が加えられてきたが、現在の形の原型は1888年7月14日の修正に基づいているのである。

次に、ボリビアのエスクードを念頭に入れながら、その詳細を調べますと、ボリビアのエスクードの基本形は大円形であり、その中央に銀鉱山で有名なポトシー山がそびえ立つ、麓に向かって左にはアルパーカが、右には枝ぶり豊かなパンの木が位置している。これらは、それぞれ鉱物、動物、植物というボリビアの自然の豊かさを象徴している。

ポトシー山から朝日が昇り、新たに誕生した国家である。大円形のエスクードの円周を囲む帯の上部には黄色いエナメル背景の上に赤くBOLIVIAの文字、下部は青色のエナメルの上には金色の9つの星があり、ボリビアの州を象徴している。なおレネ・バリオントス・オルトゥーニョ(René Barrientos Ortuño)前大統領時代に星がもう一つ加えられ、チリとの戦争で失ったリトラール地を象徴している。

次に大円形の盾を両側に、ボリビアの国旗が3本ずつ掲旗されている。エスクードの下には大砲と拳銃が2丁とインカ帝国の斧が左側に、右側には自由の帽子が位置している。そしてエスクードの上にはオリーブと月桂樹の交差した枝に囲まれ、飛び立とうとしているコンドルの姿が描かれ、長い植民地生活から解放され、自由を願う国家の思いが見て取れる。最後にボリビアの国旗の色の赤は自由のために戦った者の血、黄色は鉱物、緑は植物を象徴しているのである。

ボリビアの国旗やエスクードに込められた思いや象徴を知ると、新たな、より深い世界が見えてくるようである。

## じゃがいもの伝説

田中ネリ (CGBJ)

現在、日本において「おふくろの味」の一つとしてまであげられる「肉じゃが」ですが、ジャガイモの原産国は南米のアンデス高原であることはご存知ですか？

インカ文明の食生活を支えていたジャガイモは 16 世紀末、スペイン人によってヨーロッパに持ち帰られ、当初はその可憐な白い花からジャガイモは観賞用とされていたと伝えられている。そして 18 世紀にようやく、フランスにあった凶作を契機に、ジャガイモは人々を飢饉から救う貴重な作物になったようである。

ジャガイモはインカ文明の人々にとっては、スペイン人の征服以後も貴重な食糧であり、ジャガイモにまつわる伝説を綴ったほどである。その伝説を小学校の授業で読んだので記憶がおぼろげなところもありますが、皆様にお伝えしたいと思います。以下にジャガイモ（スペイン語ではパパ papa）の伝説をご紹介します。

スペイン人の征服後、インカ文明の人々は奴隷のような生活を強いられ、自分たちの地にいるにも拘わらず、飢えと屈辱の日々を送っていた。この状況を見かねて、インカ人の神であるピラコチャ（Viracocha）は土地を耕す働き者の男性の夢に現れ、「この種を地に植えて育てなさい、ただその実はけして食しないように」と伝えて、見慣れぬ種を枕元に残した。男性はピラコチャ神に従い、大きなタネを蒔き、しばらくすると芽が出、60 から 100 センチの植物へと育てて可憐な白い花を咲かせ、いつしか丸い実をつけるようになった。スペイン人はその実を見つけると直ちに収穫して一つ残さず渡すように命じた。男性は熟した実を手

にしながら一つ口にしかたが、神の言葉に従い、空腹に耐えて実を他の作物とともにスペイン人に渡す。額に汗を流して労働する彼らはずっと残った不作物で飢えをしのいでいた。

その夜、再びピラコチャ神が夢に現れ、「植えた植物の土を掘るように、これはあなた方の飢えを癒すであろう」と言い残して姿を消す。次の日、男性は夢にしたがって土を掘ると根元に多くの塊茎を見つける。彼はピラコチャ神の贈り物に大喜びして、早速仲間に夢を伝えて掘った塊茎を皆で分けることにする。他方スペイン人はこの目新しい実を口にし、しばらくすると魔されて、激しい痛みに襲われ死に至った。すなわち同士にとって飢えを癒す貴重な食物が、スペイン人にとって毒となったのである。

以上がピラコチャ神とジャガイモの伝説であるが、この塊茎はスペイン人の到来以前からインカ人が食糧にしていたようであるが、この伝説はインカ文明にとってのジャガイモの価値を伝えるとともに、征服者スペイン人への思いを伝えているようである。ちなみにジャガイモの芽や緑色になった皮や実には伝説の如く毒性があり、グリロアルカロイドの a ソラニンによってひどい場合、死に至ることもあるようである。

危険・有害物質  
学研の大図鑑 2003 年初版

### 編集委員

鎌田甲一 大貫良夫 杉田房子 細野豊